

「渋谷小学生監禁事件」をめぐる語りについて

山本 功（淑徳大学）

はじめに

2003年7月17日に発覚した、渋谷での小学生監禁事件 について 書くということが本稿に与えられた役割であるが、ひとまず、違う角度から始めようと思う。

フランスの社会学者、エドガール・モランの、社会学では古典に属しつつあるひとつの作品がある。『オルレアンのうわさ ―女性誘拐のうわさとその神話作用』（杉山光信訳、みすず書房 1973）。フランスの都市オルレアンで 1969 年に流布した流言を扱った作品である。そのうわさの概略は、こういったものである。ブティックの試着室に若い女性が入る。薬物を使用され、意識を失わされた女性は誘拐され、地下通路にひきずりこまれ、外国に売られる。そして、そのブティックを経営するのはユダヤ人である、といったものである。

事実無根だったのであるが、このうわさは広く流れわたったようだ。「...物語は3つのテーマから成り立っている。女性誘拐、ユダヤ人、女性の解放と現代都市、である」（杉山光信「モラン『オルレアンのうわさ』」杉山編『現代社会学の名著』中公新書 1989、124頁）。

時代も場所もまったく異なるが、事件の語られ方と、何かしら似たものを感じないだろうか。

『オルレアンのうわさ』と似かよった要素を、この事件の語り口にも見いだすことができる。渋谷という空間、女子小学生、危険な大人。「遊び・買い物 渋谷はお金必要 少女らにつけ込む大人」（朝日7月20日見出し）、「漂う少女「いい男なら」」「昨日はリムジンでやくざとカラオケに行った」「普通の子だから引っ掛かる」（毎日7月18日見出し）、「繁華街 潜む危険 低年齢化する渋谷駅周辺」（読売7月18日見出し）。

私は、とりわけ当該の事件 について 調査したわけではないので、事件について語る言葉をもたない。しかし、あの事件について語る人びとの（とりわけ、マスメディア）語り口 については、これまでのいくばくかの研究の延長線上で論じることができるかもしれない。すなわち、本稿はあの事件について論じるものではなく、事件についての論じられ方について論じるものである。

1990年代半ばから、「援助交際」という言葉を中心に、女子少年の逸脱行動が社会問題化し、様々な議論がなされてきた。法的には福祉犯による「被害者」として位置づけられてはいるが、マスメディア等の関心は「加害者」よりもむしろ「被害者」の特性に注がれており、被害者側である女子少年の「逸脱行動」が中心的に論じられていたし、現在でもそうであろう。今回の事件も、これまでの一連の語りの延長線上で語られているように思える。

## 事件の語られ方

通常、犯罪にしる非行にしる、人びとの関心の焦点は「犯人」に向く。犯人はどんな人物なのか、どんな生育歴なのか、なぜそのようなことをしたのか、等々。しかしながら、「援助交際」の場合は、むしろ「被害者」に位置づけられているはずの女子高生について論じられることが大半だった。買い手の男性についても若干論じられることもあったが、関心の焦点は圧倒的に女子高生にあてられた。

今回の事件についても、犯人と目される男性が自殺していることもあるが、新聞や雑誌の紙面は小中学生の女の子について論じる言説が爆発していた。なぜだろうか。

発信側の意図はどうか、ニュースはある種の娯楽として消費される側面がある。そして、人びとにとってこの事件は、性的な想像力をかきたてる消費財として、格好の素材だったのではないのか。

第一に、現在の小中学生の女の子が、かつて読者がそうであった時代と異なり、ブランドのファッションを買い求め、化粧をし、繁華街を闊歩するという状況が強調される。かつてとは異質な「子ども」が出現しているという状況の定義が与えられる。渋谷の「マルキュー」はその象徴的な聖地である。「ゆがんだ社会で“暴走”する思春期」(サンデー毎日8月3日)。社会に責任があるという一方で、渋谷を歩く少女のイメージが一般化され普遍化されて語られる。

第二に、1960年代フランスに出現したブティックという空間が、それまでの伝統的なフランスの都市の町並みの中に突如異質な、モダンなものとして出現したのと同様に、渋谷という空間が危険な魔境として表象される。「手錠監禁」招く魔の街」(アエラ7月28日号見出し)。

第三に、理解できない「異常な人物」としての犯人像。「変態ビジネスの深淵」「ロリコン男の頭の中は」(アエラ7月28日号見出し)。

## 被害者の位置

明示的に書かれているわけではないが、多くの記事や論説において、事件の原因の一端が、被害者である少女の側に帰せられているように読める。

「被害者だが、渋谷の街頭で高額アルバイト話に乗せられてしまった女兒の中に、髪を金色にした少女がいた。「小学生なのに、どうか」。そう感じた人は学校にも、近所にもいたが、繁華街にあこがれる少女の心を優しく諭す者はなく、被害は防げなかった」(読売7月19日)。

「いま気になるのは、性の市場価値としての自分にいとも簡単に誘惑されてしまう少女たち自身の問題である。自分が自分に負けている。性の市場価値としての自己からの誘惑に抗することができるほどの「何か」が少女たちの内部に形成されていないようにみえるのである。」(芹沢俊介「見えぬ「自己への信頼」」朝日7月29日)

これらは、述べられている内容が真か偽かは別として、被害者非難として機能しかねない言説である。被害者が非難されるという現象が、とりわけ性暴力という犯罪において告発されてきたことを、あらためて思い出す。

ここでは、被害者は純然たる被害者として扱われていない。ある種逸脱的な性格を付与されて描かれていることを指摘したい。「金髪」であることが、渋谷にいたことが、独特の

意味を帯び、被害少女らに逸脱的な特性が付与されている。先にみたように、渋谷という街はこの事件のキーワードのひとつである。そして、渋谷という名称は、他の様々な語彙と結合しやすい。コギャル、ヤマンバ、援助交際、クスリ、等々である。すなわち、90年代半ば以降の「援助交際」「テレクラ」「デートクラブ」といった性的な逸脱と容易に結合するのである。

ここに、一定の循環構造をみいだすことができる。彼女が被害にあったのは、彼女が逸脱的なふるまいをしていたためである。そして、逸脱的なふるまいをする少女は、被害にあいやすい、と。渋谷に遊びに行くような子は逸脱的である。逸脱的な子は渋谷に行きたがる。そうかもしれない。だが、繰り返しになるが、本稿では事件については論じない。メディアが事件についてどう語ったかについて論じているのである。

さらに、ほとんどすべての社の記事において、被害者の住む地域名が出ていたことにも気になる。地域が特定されれば、当然ながら通っている学校も限定される。学年もわかっている。さらに、一部被害者の容貌も言及された。当該の地域で「誰が被害者か」、無責任な好奇心が発動されることが心配される。いわゆる、二次被害のおそれである。

### **対策論と被害者非難**

ここまで、被害者非難の危険性を指摘してきた。しかしながら、いかなる問題であっても、論じる際にはたいていの場合、解決策や対策とセットになっている。そして、被害にあわないようにするためのメッセージは、えてして被害者を非難するメッセージとして読みとられえ。悪質商法にあわないための「きっぱり断ろう」というメッセージは、「きっぱり」断れなかった人を非難するメッセージに読みとれてしまう。

ここに難問がある。確かに、今後同様の被害が出ないようにするために、対策を論じるというのは至極当然のことだ。そして、加害者側にメッセージを発信するよりも、潜在的な被害者に発信した方が効果的であるかもしれない。しかし、それは犯罪の二次被害を招き寄せる危険性を常にはらんでいるのである。この問題をどうすればクリアできるのか、申し訳ないが私は未だ解答を出せないでいる。

### **おわりに**

言えることは、「事件の真相」や「社会の実態」について語るのと同様に、その語り口それ自体の水準を対象として距離をおいてみることによって、この社会がある出来事をどのように理解し、どう処理していこうとしているのかを問題とし、語り方それ自体の功罪を問うことができる、ということである。

もういちどオルレアンのうわさにもどってみよう。

「オルレアンの中心部に洒落たブティックが出現したことにたいして、地方都市の堅気のブルジョワ的生活の伝統に忠実な婦人たちは、反発を感じていた。これらの新しい店は、流行というヴィールスをまき散らしていく中心であるし、新しいファッションの服は、それ自身が危険な、若い女性の自由化」のしるしとされていたのである。だとすれば、もともとミニ・スカートは売春に通じると考えるご婦人たちのもとで、うわさがリアリティをもって語られるのも不思議はないだろう」(杉山、前掲書、127頁)。

渋谷のマルキューに通う茶髪でピアスをして甲高い声を出して群れている女の子たちに眉をひそめる人は少なくないだろう（私も、そのひとりだ。ほんとうに、苦手だ）。ましてや、それが小中学生となればなおさらだ。

だけれども、ある犯罪と、その犯罪の被害にあった少女たちを、一定の特性と関連づけることによって解釈し論じる語り口は、それ自体として検討され、反省の俎上にのせられるべきだと考える。金髪だった子は4人中ひとりにすぎない。そもそも、金髪であることと被害にあうことの論理的連関は明示されていない。4人の共通点は、渋谷に遊びにいったことだけである。渋谷のイメージが監禁事件と深く関連づけられ、被害者の特性として語られ、現在の少女一般の状況が論じられる。

こうした語り口は、今回の事件に限らず、これまでも繰り返されてきたことではないだろうか。真か偽かは保留するが、いわば、定型的な少女の性的被害に対する語り口である。

なぜそれを問題にするのかといえば、ひとつには、先に指摘した被害者非難の問題であるが、いまひとつ、実証的な根拠もなしに定型的な解釈が再生産されつづけることによって、この社会のあり方に対する洞察が、さっぱり進まないためである。様々な事件が日々報道され、膨大な言説がパブリッシュされているが、どれほど実証的な検討に耐えられるであろうか、甚だ心もとない。少なくとも、メディア言説の枠組みそれ自体を俎上にのせ検討する営為が必要である。